

第7節 仙台市北目城跡の中近世石造物

石黒 伸一朗

(1) はじめに

北目宅地28番地の菅野昭一氏宅の前、市道に面したところに石造物が数基みられた。この地は、戦国時代に栗野大膳が居城していた北目城の南端に位置している。今回、それらの石造物が都市計画道路の建設工事によって移設されるのに伴い事前に調査を行った。調査したものは中世の板碑が5基、宝篋印塔の塔身部が1基、近世の念仏供養塔が3基である。調査方法は板碑と宝篋印塔は2分の1で実測図を作成し、採拓と写真撮影をした。念仏供養塔については採拓と写真撮影を行った。石造物は調査終了後に、菅野昭一氏宅の母屋西側に移され、新たに屋根がかけられて保存されている。北目地区では菅野昭一氏宅の板碑群のほかに、安斎徳光氏宅の西側に嘉暦年間の雙圓性海塔（種子五輪塔）板碑が、穴田の毘沙門堂の境内に正和三年のア種子板碑と嘉暦二年のバン種子板碑がある。

北目宅地の板碑群を最初に紹介したのは松本源吉氏で、昭和11年に発表した『名取郡の古碑』の中において1号～4号板碑の銘文や大きさを簡単に紹介している（文献1）。さらに、次の年に発表された『陸前名取郡の古碑』の中では略図入りで全国に紹介した（文献2）。断碑である5号板碑は、念仏供養塔の前に供物台として使われていたのを、今回新たに板碑として確認したものである。宝篋印塔の塔身部は板碑群下部の発掘調査によって出土したものである。昭和58年、仙台市教育委員会では民俗学的な観点から、北目宅地を含む郡山地区の中近世石造物の分布調査を行っており調査報告が出されている（文献3）。

(2) 石造物の概要

【1号板碑】高さは73cm、最大幅は55cm、最大厚は15cmである。石材は安山岩の割り取ったものを使用している。碑面は平らな節理面で調整はみられない。頂部は破損している。両側面は大きく割って整形しており、裏面は剝離面をそのまま残している。基部は不整形なW字形を呈している。

碑面の上部に種子「ア」を薬研彫りしている。彫り幅は4.5cm、彫り深さは0.5cmである。底線ははっきりしている。鑿痕は点状に凹凸が観察されるので、丸鑿を使ったものと思われる。種子は薬研彫りの蓮台に乗っている。

蓮台の下に「正安三年六月六日」と紀年号がある。月日は二行に彫っている。願文などはみられない。

【2号板碑】大型の板碑で、高さが185cmあり、郡山地区では最大のものである。最大幅は98cm、最大厚は14cmである。石材は安山岩で、大きく割ったものを使っている。碑面は3回の大きな剝離により形成されているが、研磨などの調整はされていない。頂部は逆台形を呈している。両側面の上部には自然面が一部残っている。裏面は大きな剝離面がそのまま残っている。基部は平らになっているが、厚さは非常に薄くなっている。

碑面の上部に大きく種子「ア」を薬研彫りしている。彫り幅は9.8cmと広く、彫り深さは0.8cmと浅い。底線ははっきりしている。鑿痕は点状に凹凸が観察されるので、丸鑿を使ったものと思われる。種子は薬研彫りの蓮台に乗っている。蓮台の下に「嘉元四丙午年十月十七日」と紀年号があり、その月日の左右に「敬白」と彫っている。碑面の向かって右側に「有志者為六八日」とあり、左側に「結衆三十人也」と願文がある。文字は大きく力強い。願文からこの板碑が30人の信者で構成されていた念仏講による結衆板碑であることがわかる。

【3号板碑】高さは157cm、最大幅73cm、最大厚は30cmである。石材は安山岩の角ばった石を加工せずに使っているので、すべての面は自然面である。頂部は向かって右側に寄った三角を呈している。基部は平らで安定感がある。

碑面の上部に大きく種子「キリーク」を薬研彫りしている。彫り幅は7.6cmと広く、彫り深さは0.6cmと浅い。

底線ははっきりしており、鑿痕は点状に凹凸が観察されるので、丸鑿を使ったものと思われる。種子の下に「應長元年辛亥十月日」と紀年号がある。干支の「辛亥」の二字は異体字である。願文などはみられない。

【4号板碑】高さは83cm、最大幅59cm、最大厚10cmである。石材は安山岩の割ったものを使っている。碑面は3回の大きな剥離によって形成されているが、研磨などの調整はみられない。頂部は三角形を呈している。両側面と裏面は剥離面である。基部は平らに加工されている。

碑面の上部に種子「キリーク」を薬研彫りしている。彫り幅は3.1cmで、彫り深さは0.6cmである。底線ははっきりしている。鑿痕は点状に凹凸が観察されるので、丸鑿を使ったものと思われる。種子の下は空白になっており、紀年号や願文などはみられない。

【5号板碑】断碑で種子や蓮台の一部しか残っていない。高さは68cm、最大幅は53cm、最大厚は28cmである。種子の大きさから推定すると全体の大きさは120cm以上はあったと思われる。石材は丸い安山岩を使っている。碑面は丸く、自然面のままである。

種子は「キリーク」で、下の方しか残っていない。彫り方は鋭い薬研彫りで、彫り幅は4cm、彫り深さは1cmと深い。底線ははっきりしている。鑿痕は点状に凹凸が観察されるので、丸鑿を使ったものと思われる。種子は薬研彫りの蓮台に乗っており、蓮弁は小さく表現されている。蓮台の右下に願文の最初の一字が半分だけ残っている。

【宝篋印塔】塔身部のみである。石材は黒灰色の安山岩を使っている。保存状況は悪く、角の部分は丸くなっており、種子の彫られている面も剥落しているところが多い。高さは17.6cm、幅は15.4cm、奥行は13.2cmである。通常、宝篋印塔の塔身部は幅と奥行が同じであるが、この宝篋印塔は幅の方がやや大きく作られている。上下の面は平らに調整されている。

種子はa～c面の中央にみられ、それぞれ長方形の枠線の中に薬研彫りしている。種子を彫っている面は、枠線の外側の面よりもわずかに彫り込んで平らに調整している。a面は「タラーク」(虚空蔵菩薩)である。彫り幅は1.3cm、彫り深さは0.3cmと浅い。底線は明瞭である。鑿痕は観察できなかった。b面とc面には、種子が部分的に残っているが読めなかった。d面は長方形の枠線がわずかに残っているが、種子があったと思われる部分は深く削り取られたように窪んでおり、種子の痕跡はまったくみられない。しかし、宝篋印塔は四面に種子を彫る例が多いので、この宝篋印塔も当初は四面に種子があったものと思われる。

【1号念仏供養塔】高さは46cm、最大幅は36cm、最大厚は17cmである。石材は硬い安山岩の丸い石を使っている。碑面の調整などはまったくなく、すべて自然面である。基部は破損している。碑面の中央に薬研彫りで「南無阿弥……」とあるが、本来はその下に「陀佛」と続き、六字名号があったものと思われる。「弥」の字は異体字である。向かって右側に「元文元辰……」と、左側に「八月朔……」と紀年号がみられる。

【2号念仏供養塔】地上高は68cm、最大幅は40cm、最大厚は35cmである。石材は硬い安山岩の丸い石を使っている。碑面の調整などはまったくなく、すべて自然面である。

碑面の中央に薬研彫りで「念佛供養」と大きく彫り、向かって右側に「寶曆四甲戌天」、左側に「八月二十七日」と紀年号がある。左下に「講中」とあり、その下に16人の名前がみられる。

【3号念仏供養塔】地上高70cm、最大幅66cm、最大厚は48cmである。大きな重量感のある安山岩の角ばった石を使っている。碑面の調整などはまったくなく、すべて自然面である。

碑面の中央に大きく「南無阿彌陀佛」と薬研彫りしており、六字名号は蓮台の上に乗っている。その向かって右側に「念佛供養塔」、左側に「明和元年八月五日」と紀年号がある。右下には「念佛講中」とある。碑面の下部から左側面にかけて16人の名前が彫られており、最後に「右人數十六人」「師匠」とみられる。

(3) ま と め

【板碑】板碑は発掘調査の結果、原位置を動いており、他の場所から移されてきたものと思われる。また、北目城の中に位置しているが、戦国時代に築造された城と鎌倉時代の板碑とは直接的な関係はないようである。

石材はすべて安山岩である。仙台市内の板碑は基本的に安山岩を使ったものが多く、北目地区も例外ではない。素材としては大きく割り取ったものと、角ばった石を加工せずにそのまま使ったものがある。頂部は3・4号板碑のようにやや三角形のものと、2号板碑のように逆台形を呈するものがある。頂部から側面の加工整形は大きく割った程度で、細かな剝離調整はない。碑面には研磨などの調整はまったくみられない。

種子は「キリーク」(阿弥陀如来)が3基、「ア」(胎藏界大日如来)が2基で、どちらも仙台市内の板碑で多くみられる普遍的な種子である。

紀年号がみられる板碑は3基あり、それぞれ正安三年(1301)、嘉元四年(1306)、應長元年(1311)である。それらはすべて鎌倉時代後期の造立で、その期間は10年間で短い。4・5号板碑には紀年号がみられないが、種子の書体は南北朝時代の板碑と比べると力強いので、それらも鎌倉時代後期の板碑と思われる。

願文のあるものは2号板碑のみで、その1行目の中に「六八日」とみられる。仏教用語では三十五日のことを「五七日」や、四十九日を「七七日」などと書くことが多くあるので、「六八日」とは六日の8倍の期間、つまり四十八日のことを表現したものと思われ、四十八日とは別時念仏で阿弥陀如来の四十八願の思想に基づき、四十八日間にわたって念仏を唱えたことと考えられる。このように、念仏講で四十八日間の別時念仏を行ったことにより結衆して板碑を造立した例は、郡山2丁目10-5の佐々木功氏宅にある嘉暦三年(1328)の30余人によるア種子板碑、多賀城市南宮の慈雲寺にある永仁二年(1294)の35人によるアク種子板碑(文献4)、同市新田にある正和元年(1312)の68人によるア種子板碑などがある(文献4)。これらはすべて鎌倉時代後期の造立で、この時期に郡山と多賀城西部の二地域において、別時念仏を行う念仏講が盛んに活動していたことを示すものである。

【宝篋印塔】宮城県内の宝篋印塔の造立数は、板碑と比べると極端に少ないので、その研究はほとんど行われていない。北目城跡からの宝篋印塔の出土は貴重な資料の追加である。この宝篋印塔の年代は、種子の書体から鎌倉時代後期から南北朝時代初め頃のものと考えられ、宮城県内では古い段階の宝篋印塔と思われる。

仙台市内で宝篋印塔の塔身部が確認されているのは、太白区西中田の安久東遺跡(文献5)、太白区坪沼字北ノ下の山田義信氏宅の2カ所である。その内、種子がみられるのは安久東遺跡から出土したものであるが、種子の書体は弱く室町時代から江戸初期頃のものと思われるので、北目城跡の宝篋印塔よりは新しいと思われる。

【念仏供養塔】石材は3基とも安山岩で、整形や碑面の調整などはまったくなく、自然のままである。

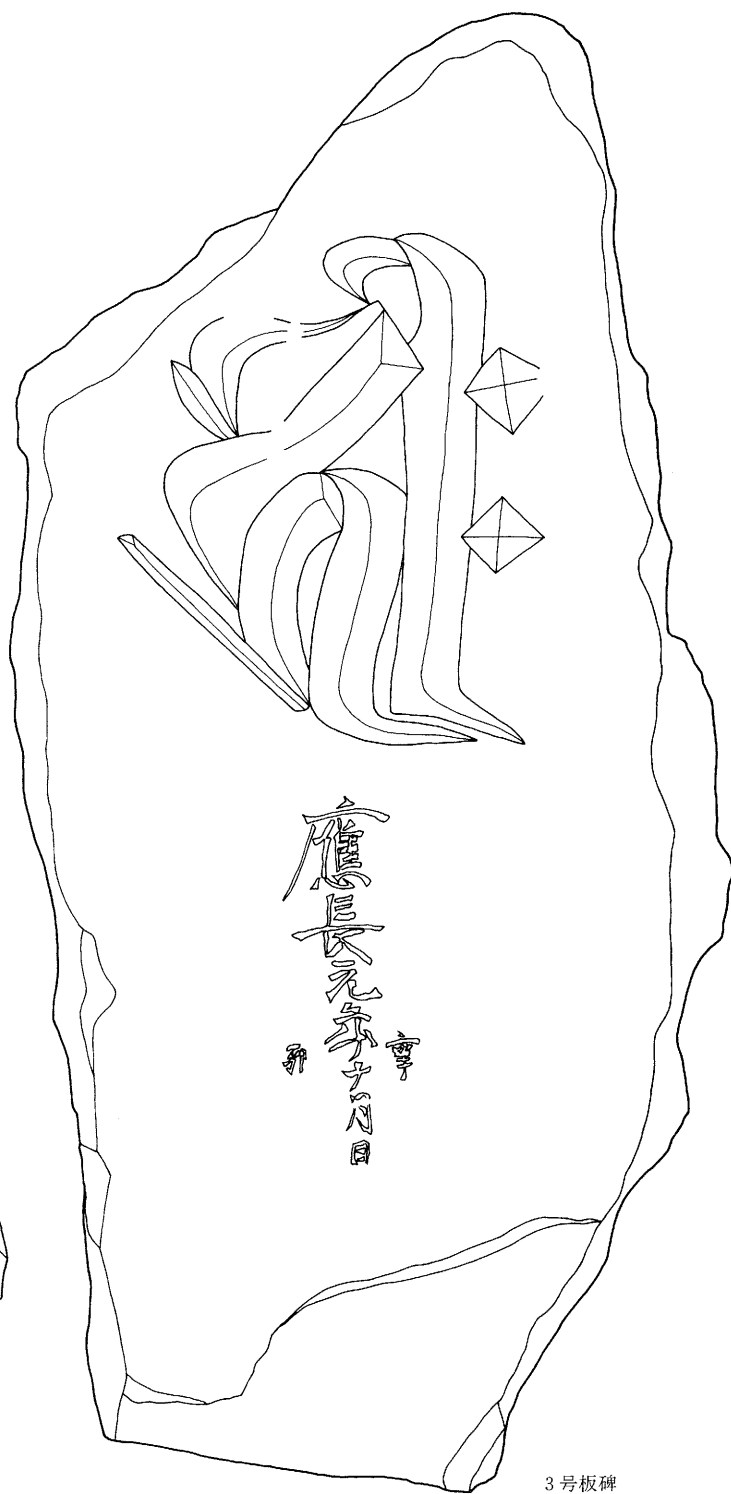
年代は元文元年(1736)、宝暦四年(1754)、明和元年(1764)で、造立期間は28年間である。すべて江戸時代後期に属している。月は3基とも8月なので、秋の彼岸の時期に念仏講に信者が集まり、念仏を唱えていたのであろう。2・3号念仏供養塔の名前は、どちらも16人なので、北目地区において江戸時代後期の念仏講を構成している人数は16人が基本になっていたものと思われる。

引 用 文 献

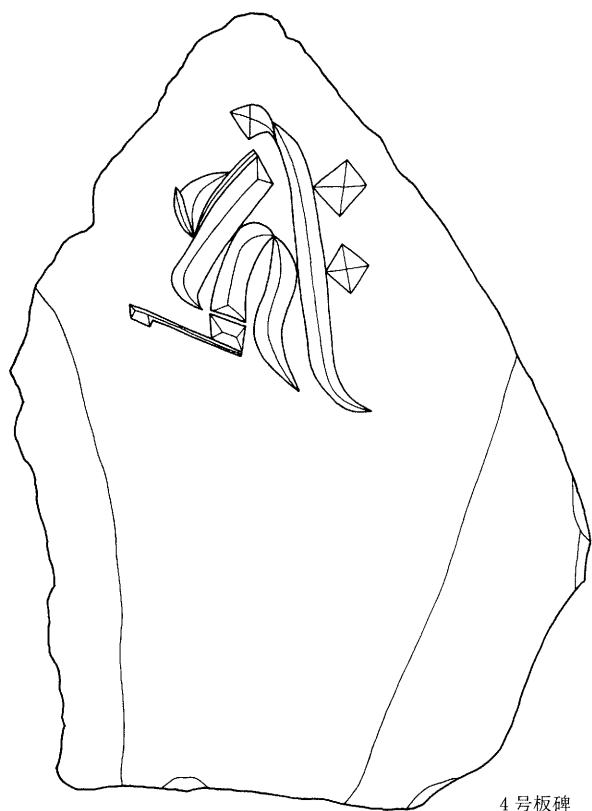
- ① 松本源吉「名取郡の古碑(1)～(3)」『仙台郷土研究』6-2・4・5 仙台郷土研究会 昭和11年
- ② 松本源吉「陸前名取郡の古碑」『考古学』8-2 東京考古学会 昭和12年
- ③ 山口 宏「仙台市郡山の民俗」『仙台市文化財調査報告書』第49集 仙台市教育委員会 昭和58年
- ④ 石黒伸一郎「七北田川下流域の板碑」『仙台市文化財調査報告書』第121集 仙台市教育委員会 昭和63年
- ⑤ 岩渕康治・田中則和「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集 仙台市教育委員会 昭和51年



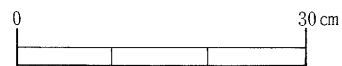
1号板碑



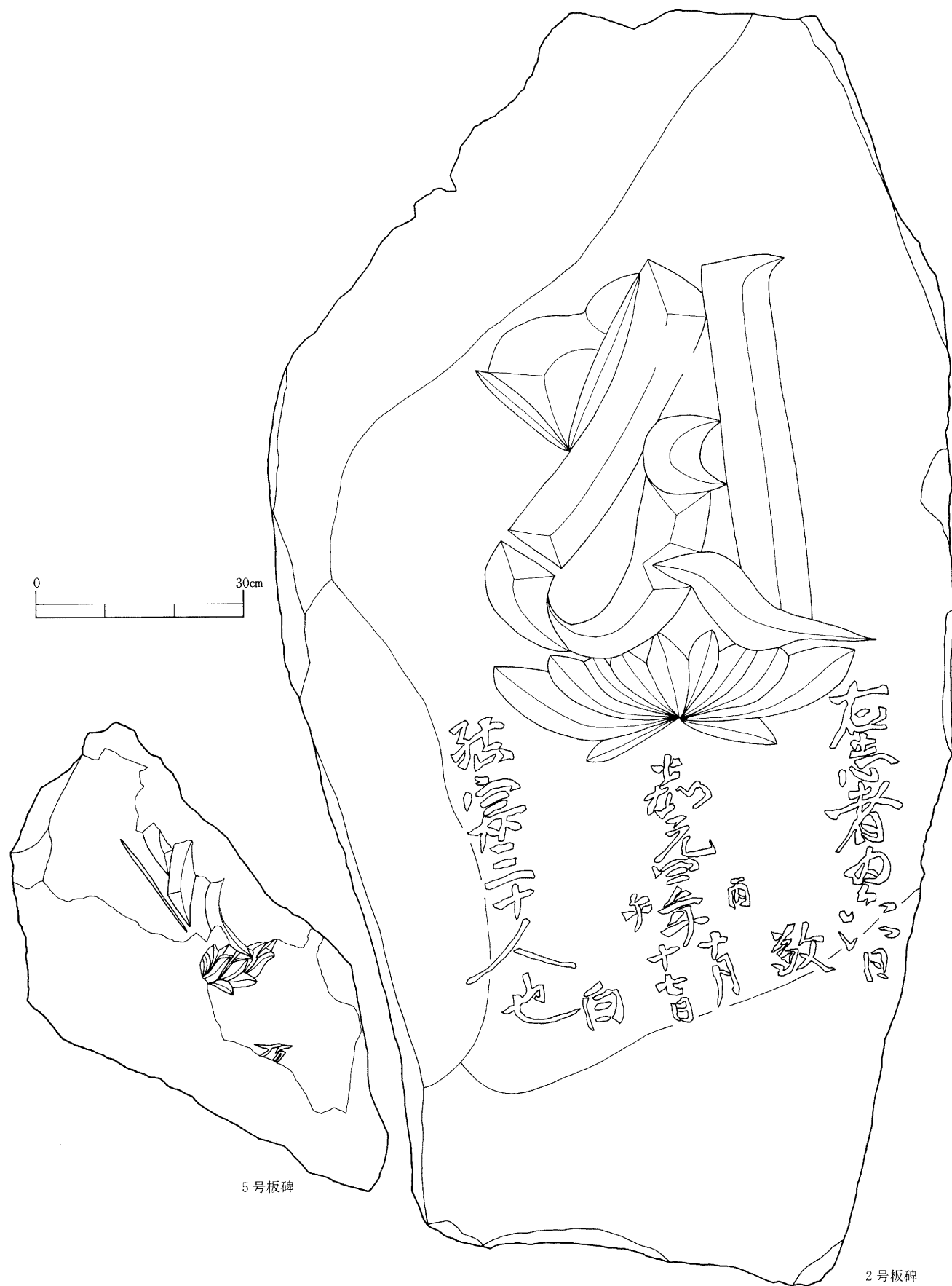
3号板碑



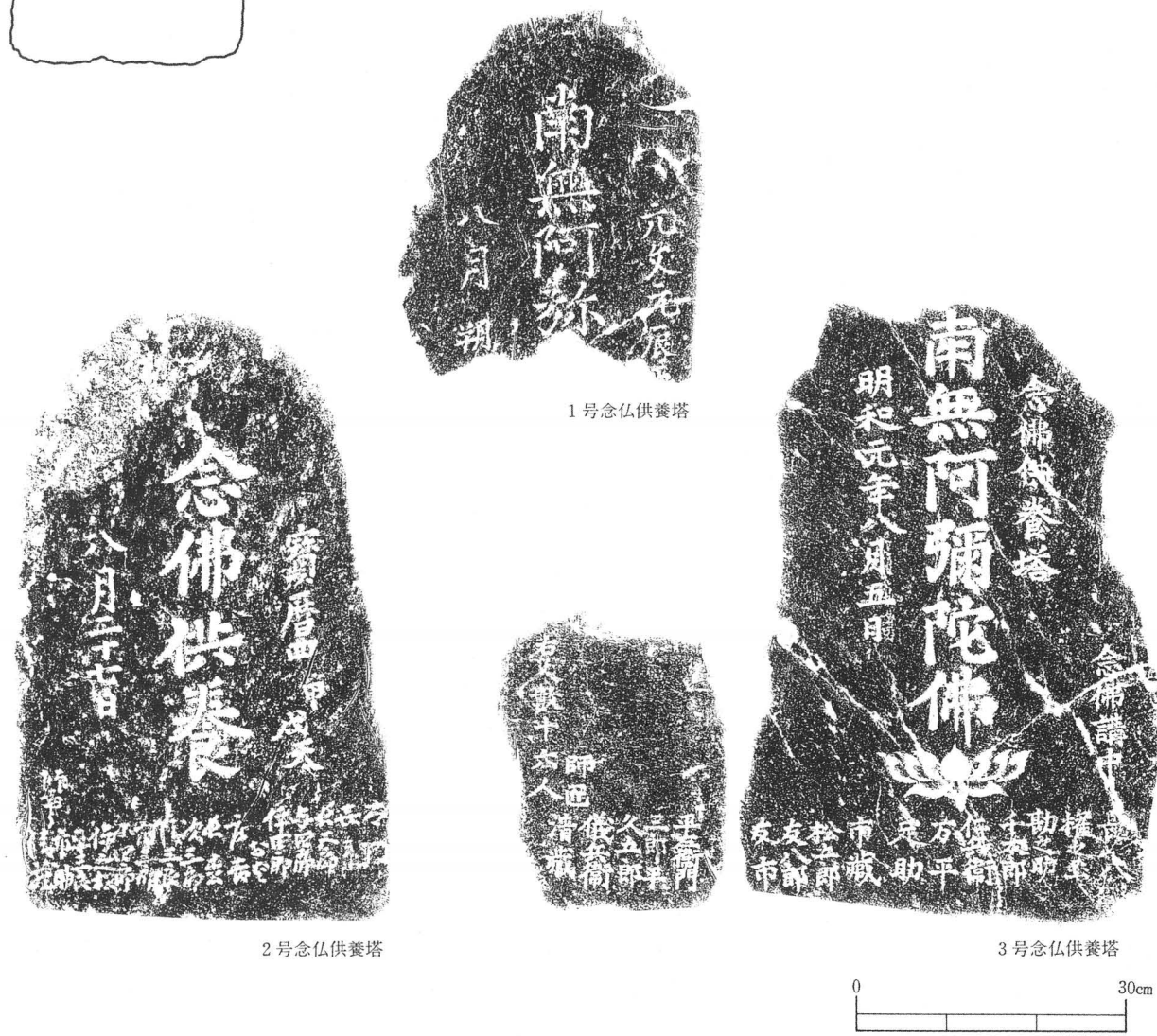
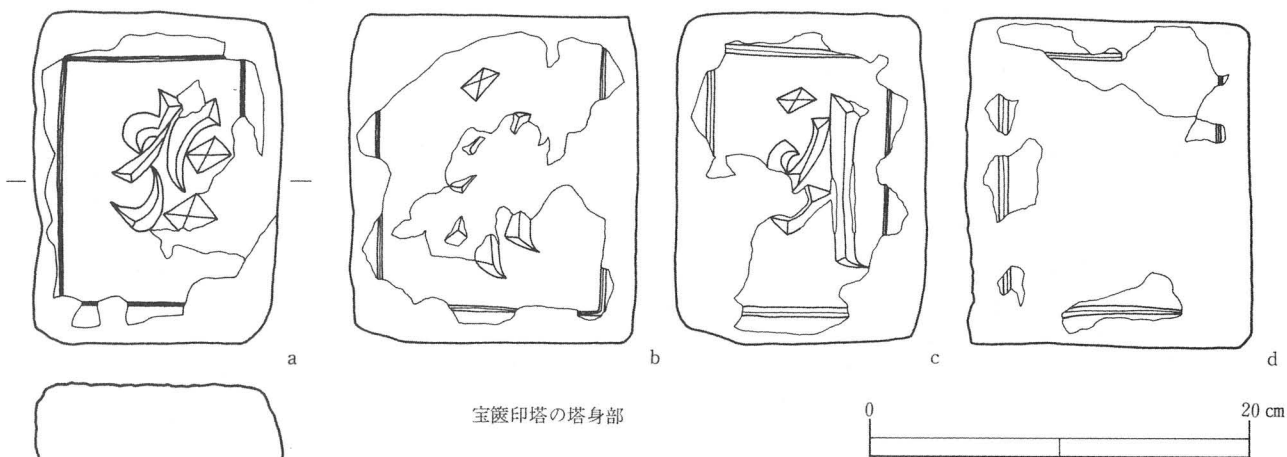
4号板碑



第1図 板碑実測図



第2図 板碑実測図



第3図 宝篋印塔実測図・念仏供養塔拓影



写真1 中近世石造物群の全景



写真2 1号板碑の全形



写真3 1号板碑の種子部分

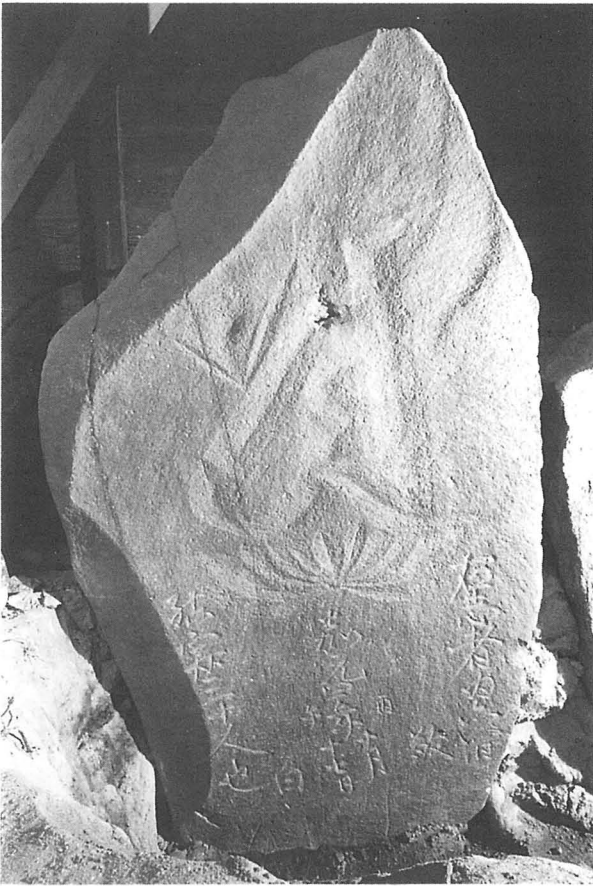


写真4 2号板碑の全形

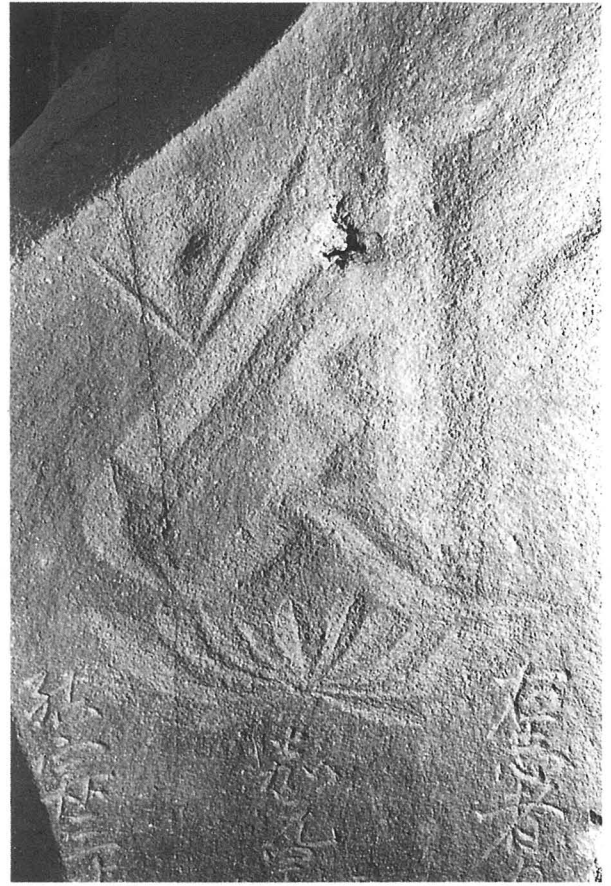


写真5 2号板碑の種子部分



写真6 2号板碑の銘文部分

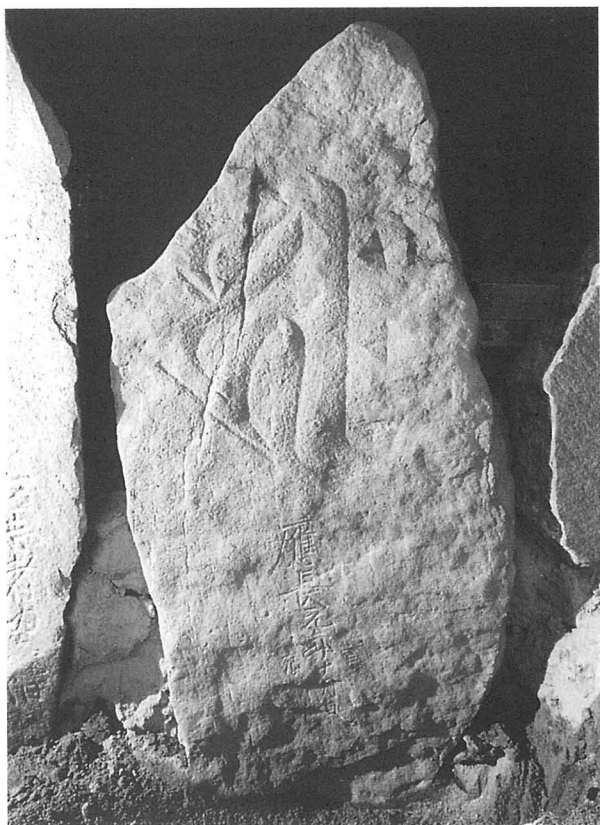


写真7 3号板碑の全景



写真8 3号板碑の種子部分



写真9 3号板碑の紀年号部分



写真10 4号板碑の全形



写真11 4号板碑の種子部分

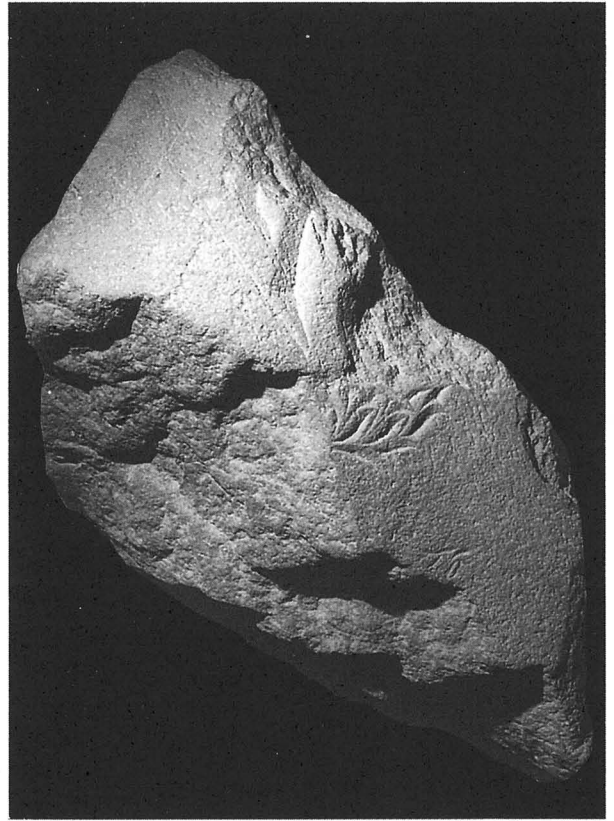


写真12 5号板碑の全形



写真13 宝篋印塔の塔身部



写真14 1号念仏供養塔



写真15 2号念佛供養塔



写真16 3号念佛供養塔

表1 板碑一覧表

名 称	石 材	高 さ	最大幅	最大厚	種 子	荘厳	銘 文	備 考
1号板碑	安山岩	73cm	55cm	15cm	ア	蓮台	正安三年六月六日	西暦1301
2号板碑	安山岩	185cm	98cm	14cm	ア	蓮台	右志者為六八日 丙 敬 嘉元四年十月十七日 午 白 結衆三十人也	結衆板碑 西暦1306
3号板碑	安山岩	157cm	73cm	30cm	キリーク	なし	應長元年 ^{辛亥} 十月日	西暦1311
4号板碑	安山岩	83cm	59cm	10cm	キリーク	なし	なし	
5号板碑	安山岩	(68)cm	(53)cm	28cm	キリーク	蓮台	□……	断碑

表2 念仏供養塔一覧表

名 称	石 材	高 さ	最大幅	最大厚	銘 文	備 考
1号念仏供養塔	安山岩	(46)cm	36cm	17cm	元文元辰…… 南無阿弥…… 八月朔……	基部破損 西暦1736
2号念仏供養塔	安山岩	地上高68cm	40cm	35cm	寶曆四甲戌天 念佛供養 八月二十七日 講中	名前16人 西暦1754
3号念仏供養塔	安山岩	地上高70cm	66cm	48cm	念佛講中 念佛供養塔 南無阿彌陀佛(蓮台) 明和元年八月五日 師匠 右人數十六人	名前16人 西暦1764